

訳者あとがき

本書は Noël Carroll, *On Criticism*, Routledge, 2009 の全訳である。キャロルの仕事が邦訳されるのはおそらく初めてだろうから、まずは著者のノエル・キャロルについて少し紹介しておこう。

キャロルは分析美学という学問を牽引してきた哲学者である。現在はニューヨーク市立大学大学院センター (CUNY Graduate Center) の卓越教授を務めている。著書・編著を合わせると二〇冊以上あり、アメリカ美学会の会長も務めたほどの大御所研究者だが、今もトップレベルの学術誌に精力的に論文を発表し続けている。

美学者としてのキャロルの功績は計り知れない。フィクション、美的価値、芸術的価値と倫理的価値との関係など、美学の中核的テーマをあつかう論文を数多く執筆しているだけでなく、大衆アートやユーモアなど、美学の歴史からすればやや周辺の（だが興味深い）トピックについても多数の論文がある。そして彼のすごいところは、ただ多方面で論文を書いているだけでなく、その論考の多くが各トピックでの議論の出発点となるような基本論文の地位を確立している、という点にある。それまで曖昧に語られていた領域にキャロルが乗り込んでいった結果、議論が整理され、そこから生産的な論争が始まる——こういうケースが数多く見られるのだ（この「地ならし特攻隊長」的な仕事を多方面にわたって行なってきたところにこそ、美学者キャロルの真の功績があるとわたしは思っている）。もちろん、

議論が活性化することでキャロルの論文への批判も多くなるのだが、それは何よりも「その分野での議論を明確に定式化することで、何が話題になっており、その領域でどういう主張がなされているのかを明示化する」という哲学者として重要な仕事を、キャロルが高いレベルで行なってきたからだろう。また、キャロルは哲学だけでなく映画研究でも博士号を取得しており（博士論文はバスター・キートンの『キートン将軍』について）、映像批評家としても活躍している。この経歴だけを見ても、多彩な人物だということが分かるだろう。

さて、そのキャロルが批評をテーマに執筆したのが本書である。序文で述べられているように、分析美学という学問は当初は「メタ批評としての美学」という姿勢を強く打ち出していたが、時代が下るにしたがって、批評の哲学というトピックは影を潜めるようになっていった。この批評の哲学を復活させようという目論見の下、書かれたのが本書である。原著はラウトレッジ社の『Thinking in Action』という、哲学の話題を一般向けに紹介するシリーズの一冊であり、そのため著述のスタイルも、現代美学についての前提知識をあまり要求しないような書き方になっている。本書をお読みになった読者は、同じ主張が繰り返し述べられるところや冗長な印象を受けるかもしれない（その点は本書をあつかう書評のいくつかでも指摘されている）が、これは一般向けに書かれた本としての配慮だと受け止めるべきだろう。

本書でのキャロルの主張は明確だ。批評とは、理由にもとづいた価値づけ（reasoned evaluation）であり、記述、分類、文脈づけ、説明、解釈、分析といった作業は、その価値づけという最終目的を支

えるために行なわれる。本書ではこの主張を守るために各種反論への応答がなされ、その中で既存の批評観の問題点が明らかにされていく。その議論の合間で現代の批評家に向けて挑戦的な主張が行なわれているところも、本書の魅力のひとつだろう。

若干懸念があるとしたら、本書でキャロルは作品解釈だけでなく、作品評価の場面でも、やや強めの現実意図主義を採用しているという点である。そこに不満をもたれる方は、ぜひ応答を考えてみてほしい。真剣に応答を練り上げようとする、この話が美学のその他のトピックと複雑に結びついていることがわかってくると思う。めくるめく批評の哲学へようこそ。

なおタイトルについてだが、出版状況をめぐる諸般の事情に鑑み、原著にはない「芸術批評の哲学」という副題をつけさせてもらった。とはいえ、本書の議論が当てはまる領域は、狭い意味での「芸術」に限定されるべきではない。アニメ、ゲーム、ファッションなど、さまざまな文化領域で、本書の議論は役に立つだろう。日常会話の中でそうした品々について語るさい、本書の議論を思い出して頂けると会話が弾むかもしれない（し、喧嘩の元になるかもしれない）。

最後に訳者としていくつかのコメントを。序文で言われているように、「批評の哲学」は美学のさまざまなトピックと結びついている非常にエキサイティングな分野なのだが、これまで日本にはきちんと紹介されてこなかったように思う。また、わたしは二〇一三年に『分析美学入門』（ロバート・ステッカー著、勁草書房）を翻訳したが、さまざまな話題を幅広くあつかっているその本においても、批評の哲学という分野はあまりきちんと論じられていなかった。それが本書の翻訳を決意した理由の

ひとつである。

もうひとつの理由は、本書が提示する批評観が、日本ではあまり馴染みのないものだと思われたからだ。翻訳に取りかかると前に、批評家的な活動をしている何人かの友人にキャロルの批評観をぶつけてみたのだが、あまり同意・共感を得られなかった（彼らはまさに、キャロルが本書で対決しているような批評観をもって反論してきたのだ）。彼らの拒否反応はわたしには非常に興味深かったし、そのことは、本書の翻訳に取りかかるさい、心情的な後押しともなった。本書がまた飲み会での議論のきっかけにでもなれば、とても嬉しい。彼らがどういう反応をするか楽しみだし、本書刊行後は、また別の観点から彼らの批評文を楽しく読めるのではないかと期待している。

『分析美学入門』と同じく、今回も勁草書房の関戸詳子さんにお世話になった。また、訳文を練り直す作業の途中で、岩切啓人、小出咲、高田敦史、松永伸司、渡辺一暁の各氏から非常に有益なコメントを頂いた。彼らを含め、気の合う研究仲間たちが日頃ふとした会話の中で本書翻訳の意義を語りながら応援の声を送ってくれたことは、苦しい翻訳作業を進める上でとても励みになった。ありがとう。そして最後に、子供を寝かしつけたあと読みにくい訳文を夜中まで読んでコメントをくれた妻、そして毎日早朝に元気な笑顔で起床を助け、強制的に規則正しい生活を送らせてくれる息子にも感謝を。僕が美学者というカテゴリーで何らかの達成ができていたとしたら、その大部分はこういった方々に支えられている。